

鶴子中原遺跡

遺跡番号	212-024
調査回数	第1次
所在地	山形県尾花沢市鶴子字原の内内地内
北緯・東経	37度56分40秒・140度49分11秒
調査委託者	山形県観光文化スポーツ部博物館・文化財活用課
起回事業	農地整備事業（経営体育成型）鶴子六沢地区
調査面積	190㎡
受託期間	令和5年9月1日～令和6年3月31日
現地調査	令和5年10月3日～11月21日
調査担当者	植松暁彦（現場責任者）・氏家信行
調査協力	村山総合支庁産業経済部北村山農村整備課、鶴子六沢土地改良区、尾花沢市教育委員会
遺跡種別	集落跡
時代	縄文時代
遺構	土坑・柱穴・風倒木痕
遺物	縄文土器・石器（文化財認定箱数：15箱）



遺跡位置図（S = 1:50,000）

調査の概要

鶴子中原遺跡は、尾花沢市街地から南東約8kmの鶴子地区に位置し、丹生川左岸の河岸段丘上に立地する。

今回の調査は、農地整備事業の用排水路工事に伴い、昨年度調査された原の内A遺跡第4次調査（縄文時代中期。約5,000年前）の北側にあたる。

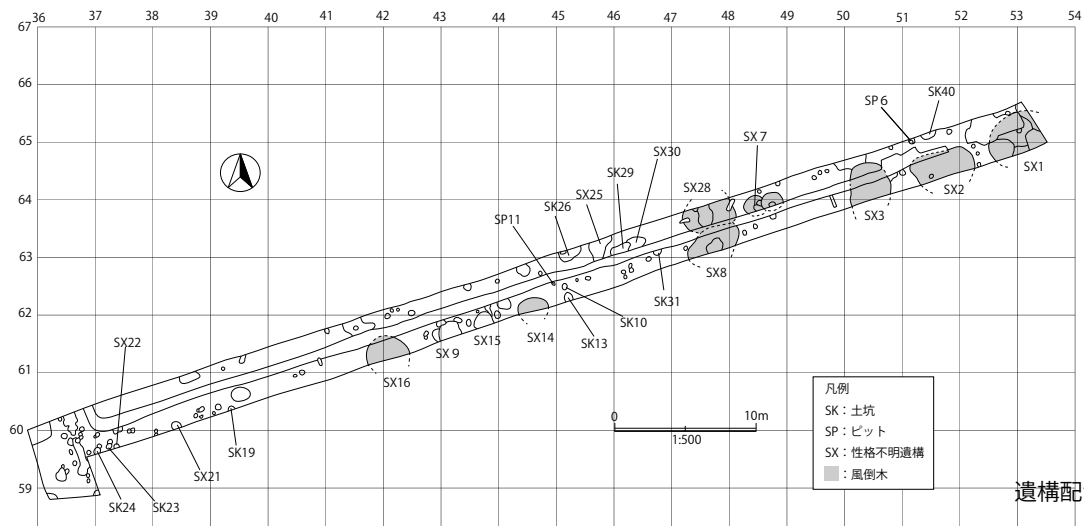
遺構では、調査区東側を主に、直径1m前後の貯蔵穴やゴミ捨て穴と考えられる土坑11基、柱穴等と考えられる多数の小ピットが確認され、他に直径・深さ共に約

1.5mの大型の風倒木痕が発見された。

遺物は、これら遺構内から県内では数少ない縄文時代早期中葉～後葉（約8,000～7,000年前）の貝殻を使用し文様を描く所謂「貝殻文系土器」群が出土した。特に風倒木痕からは、貝殻の腹縁を押しあて鋸歯状や矢羽根状の文様を施す古相の「貝殻沈線文土器」、貝殻の腹縁を押し引いた新相の「貝殻条痕文系土器」が出土し、継続的な集落の形成がうかがえた。

石器では、狩猟具の石鏃や加工用ナイフの石篋、木の伐採などに使用された磨製石斧、石器の一辺に連続的な加工を施す削器、皮なめし具とされる搔器などが出土した。また、これらを製作する際の破片（剥片）やその素材（石核）も出土し、集落での活動の一端が知れる。そして、特に石器では、堅果類の粉碎具とされる凹石（くぼみいし）が20点以上と多く出土し、当時の集落周辺の活発な森林活用がうかがわれる。

一方、調査では、包含層や地山に、集落と同じ縄文時代早期（約1万年前）に単発的に塊で降下した大蔵村の肘折火山噴出物「肘折パミス（軽石）」などが確認された。今回の調査は、当時の自然災害規模や遺跡立地、周辺環境の復元も検討できる貴重な資料も得られた。



遺構配置図 (1:500)



調査区遠景 (北より)



遺構完掘状況 (東より)



SX3 風倒木痕の遺物出土状況



貝殻沈線文系土器出土状況



貝殻沈線文系土器 (約 8,000 年前)



石鎌・石ペラ・削器・搔器・磨製石斧